

自治体刊・郷土史本における朝鮮認識 の問題について

——富山県の電源開発現場の記述・記録を手掛かりに

村上 邦夫

はじめに

- 1 富山県の近代と電力
- 2 富山県内河川における電源開発——発電所及びダム建設と郷土史本
- 3 電源開発建設現場の事故による朝鮮人労働者の犠牲
- 4 黒部川水系における朝鮮人労働者の存在と自治体刊・郷土史本の記述・記録
- 5 朝鮮人労働者の存在と自治体刊・郷土史本の記述・記録について
おわりに

はじめに

本稿は、戦前、「電源王国」といわれた富山県で電源開発の建設現場に従事した朝鮮人労働者に焦点をあてる。この間、現場の事故で犠牲になった朝鮮人労働者などを自治体刊・郷土史本がどのように記述・記録しているかを筆者は調査した。本稿では、その調査結果を中心論ずるものであるが、最初に明治以降、富山県の近代の歩み、特に戦前における電力と電源開発にふれ、次に主な河川における電源開発計画の進捗状況を概説する。続いて、その電源開発の工事現場における事故で犠牲になった朝鮮人労働者の実態を把握する。その際、犠牲が突出して多い黒部川水系の工事場での事故を詳しくみるとともに、自治体刊・郷土史本とほかの出版物にある記述・記録を比較、検討するものである。本稿でいう自治体刊・郷土史本とは、富山県内の各自治体が、昭和 30 年代から平成中期にかけて編集・刊行した主な郷土史本である。この場合、幕末までの叙述で終わっている通史（例えば上巻）及び文化編、自然編を除くとともに史（資）料編の郷土史本も対象としない。つまり明治期以降の通史叙述を主な内容とした郷土史本に限った。その結果、県史 2 冊、市史 16 冊（9 市）、町史 29 冊（16 町）、村史 11 冊（8 村）の計 58 冊となり、56 頁【表 3】「富山県内の

自治体刊・郷土史本リスト」として掲げた⁽¹⁾。また参考までに富山県の自治体行政区画を次頁【図1】に示した。

なお、本稿には資（史）料などにおいて差別的表現が数多くあるが、歴史的事実を研究する上で必要と考え、そのまま使用する。

1 富山県の近代と電力

今日でもそうであるが富山といえば米どころ、農業県だとみられることが多い。ただ近代の歴史をたどると別の面がみえてくる。工業生産物価額はすでに、1921（大正10）年の時点で農業生産物価額を超えている。第1次世界大戦後に本格化した富山県の工業は伝統産業の壳葉業・織物業・銅器製造業に代わり、化学工業（カーバイド・化学肥料など）、金属工業（アルミ精錬・銑鉄鋳物など）、機械器具工業（電気機械器具・原動機など）が新たな成長産業となっていた⁽²⁾。こうした化学工業や金属工業の発展を根底で支えたのが富山県内で調達できた豊富で安価な電力であった。

電力に関する世界事情でいえば、1887（明治20）年前後に電気分野の新しい発見・発明が相次いだ。とりわけ発熱電球と電車の発明は当時、国家の形成と構造に大きな影響を及ぼした。日本国内では1886（明治19）年に東京電灯株式会社（以下、東京電灯と略）⁽³⁾が日本橋茅場町に設立された。ここから架空電線で供給される電力によって、例えば当時の鹿鳴館の照明がガス灯から白熱電球に変わったくらいである。翌年国内最初の火力発電所が建設された。こうして一般家庭にも電灯が普及し始めた。ただし1894（明治27）年に朝鮮を侵略した日清戦争の影響で石炭が高騰したため、水力発電が勃興することになる。その始まりは琵琶湖疎水事業で1892（明治25）年に建設された京都の蹴上発電所であり、ここの電力を使って1895（明治28）年、京都電気鉄道株式会社が開業した。日本初の路面電車を走らせた⁽⁴⁾のがこの京都電気鉄道株式会社である。その後、電気事業者の監督が全国統一化された1896（明治29）年頃の電気事業者数は火力発電23か所、水力発電7か所、火・水力併用3か所と増え、電灯数も12万余に増加した。こうして電力需要は都市部の電灯から工場の動力にまで伸び、1911（明治44）年に電気事業法が制定された。20世紀に入って日本は、義和團戦争・日露戦争・第一次世界大戦などの帝国主義戦争を主導する側に立ち、それにともない電力に対する軍需需要が増大したのである。

この電力を供した富山県内の電気事業会社は、明治末（1910年頃）に8社2支店で発電設備は約5千kw弱にとどまり全国の1%に過ぎなかった。それが1914（大正3）年に東京電灯が福島県猪苗代から東京までの約200kmの高圧遠距離伝送に成功してから山岳地帯の電源開発が進み、発

(1) 富山県の自治体数は1889（明治22）年の合併をへて1912（大正元）年の272が最大で、昭和初期の戦時中に漸減し、戦後の1954（昭和29）年には8市28町31村の67自治体にまで減少した。さらにそれが昭和30年代に再び合併・編入が繰り返されたが、この時期以降に各自治体で郷土史本が編集、刊行されたものである。筆者はこれらを2025（令和7）年4月から6月にかけて調査したが、今後も継続して調査研究する予定である。

(2) 深井甚三、米原寛『富山県の歴史』山川出版社、1997年、280頁

(3) のちの東京電力であり、翌年には名古屋電灯、神戸電灯、京都電灯、大阪電灯が設立された。

(4) 関東では京都に遅れること3年、多摩川沿いに民間の電気鉄道が登場する。ただし日本において路面電車の試運転が行われたのは1890（明治23）年の上野で開催された第2回国勧業博覧会時である。

【図1】1970（S50）年 富山県の自治体・市町村行政区画



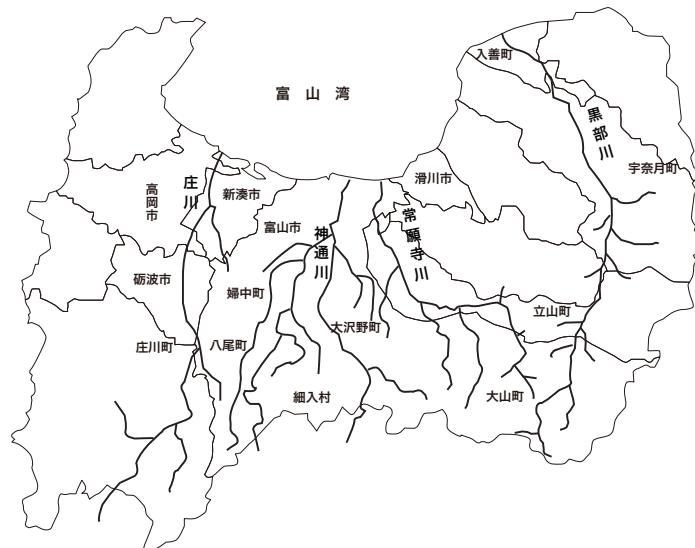
出典：『ふるさと富山歴史館』 富山新聞社、2001年、499頁

電所は大型化し会社も増えた。富山県も例外ではなく 1919（大正 8）年の水力発電所出願者は 180 にものぼった。富山県の主な河川である神通川、黒部川、常願寺川、庄川は、積雪・降水量が豊富で河川は急勾配、さらに港湾運送に恵まれ砂利などの資材も豊かという条件がそろっていたのである⁽⁵⁾。こうしたなかで官製の発電所建設設計画が浮上する。その起源は明治末に遡るが、韓国併合後の 1911（明治 44）年、当時の浜田恒之助富山県知事の下で「産業調査会規則」が制定され、1915（大正 4）年に「富山県産業奨励方針」がまとめられた。この方針の核心が水力電気事業であった。これを継承した井上孝哉知事は 1917（大正 6）年暮れの通常県会で、水力電気問題に言及した。それは、全国の発電力 250 万馬力に対し、富山県は、70～80 万馬力の発電力を包蔵するから、普段は洪水の元凶である急河川の水流を生かした発電によって転禍為福とすべきであると述べ、後の“電源王国・富山”建設を展望したといわれている⁽⁶⁾。その後 1919（大正 8）年 4 月に東京府内務部長から富山県に転任した東園基光知事が県政上の最大課題に治水と財政再建をあげた。同年秋、立山砂防の実地調査に富山入りした原田内務技監が知事らに、常願寺川の支流のうち、真川、称名川、和田川等は“発電事業見込みあり”と伝えると、知事は原田技監に現地調査を依頼した。原田技監は調査の結果、発電能力ありと報告。東園知事は将来の富山県の財源にできると考え、富山では水害の最大の元凶であった常願寺川水系の水力コントロールを兼ねた県営発電事業を立案し、1920（大正 9）年から 1923（大正 12）年にかけて水利使用と電気事業の県営の許可を得たのである。こうして富山県の大正末の発電設備は 14 万 kw にまで増加し、全国の 7% を占めるまでに至った。昭和に入ると富山県の発電所建設がさらに増え、1934（昭和 9）年の水力発電設備は 40 万 6

(5) 高瀬保『図説 富山県の歴史』河出書房新社、1993年、218頁

(6) 『富山県史 近代下』富山県, 1984年, 92-103頁, 915-923頁

【図2】富山県の四大河川



千kwに達し、全国1位の「電源王国・富山」となったのである。

2 富山県内河川における電源開発——発電所及びダム建設と郷土史本

(1) 神通川水系

先述した富山県の神通川、黒部川、常願寺川、庄川の主な河川のうち、県内最初の発電所は1899（明治32）年に神通川水系で建設された大久保発電所（旧大沢野町、現富山市）である。当時、他県における発電所は火力が主であったが、地元出身の一青年が、「大久保用水の落差利用が最良の方途である」とした決断⁽⁷⁾が契機となったが、発電を開始したのは富山電灯株式会社である。この会社は1907（明治40）年に富山電気株式会社に社名を改称し、翌1908（明治41）年春に神通川上流の猪谷付近（後の大沢野町、現富山市）と蟹寺（旧細入村、現富山市）の2か所で取水し、6km余の導水管を引いて庵谷（旧細入村、現富山市）で発電する庵谷発電所の建設を始めた。かなりの難工事のため竣工したのは1911（明治44）年1月になった。送電先は富山・八尾・東岩瀬・新庄方面から魚津・滑川・上市・高岡方面の広範囲に及んだ。この出力は当時の日本で5本の指に入り、北陸では最高のものであった⁽⁸⁾。当時の村人の様子は、「村内の人々も結構人夫として従事したようである。……若年の氏は日当16銭で……年上の……人の日当は30～40銭であったらしい。……当時運送業に従事する人は……トンネル工事やセメント運搬の下請けでかなりの利を得た」⁽⁹⁾と記述されている。ところが1914（大正3）年に大洪水が発生し、庵谷発電所の導水路が土砂に埋まってしまい約40日間発電がストップした。そこで富山電気株式会社は庵谷第二発電所を

(7) 『大沢野町史』大沢野町、2006年、314-315頁

(8) 『細入村史 通史編』細入村、1987年、459頁

(9) 前掲『細入村史 通史編』461頁

起工することにした。1916（大正5）年9月に建設工事が開始され、1919（大正8）年に完成した。庵谷第二発電所の電力は伏木港岸（旧伏木町、現高岡市）の電気製鉄株式会社に供給され、県内の工業地域の成立の基礎となつた⁽¹⁰⁾。郷土史本は、この庵谷第二発電所の工事現場を書いていないが、富山電気株式会社の山田常務が現場に、「二人引きの人力車で超えた庵谷峠の話や、いかに優秀なトンネル技術者を確保したか」という逸話を載せている。

大正時代も後期に入った1920（大正9）年、日本電力株式会社（以下、日本電力と略記）が蟹寺発電所建設構想を発表した。僅か戸数30戸、人口約150人の村は1万5千坪の土地を坪50銭で売る代わりに会社に対し、10燭光（約25W）の電灯100灯を永久に無償供与すること⁽¹¹⁾、水槽からの農業用の分水を求めた。「大正10年……測量が始まった。……大正11年……約20名の日本電力社員によって工事着手の準備が開始された。……本工事は大正12年の春早々に開始され、人と資材がどっと流入した。……蟹寺の人口は3,000人に達したといわれ、たいへんな賑わいであった」⁽¹²⁾。しかし「せまい部落内に密集していたわけで、もちろん工事関係者の劣悪な居住条件はあつたにしろ、大変活気のある状況であった」⁽¹³⁾。また工事現場の様子の一端も伝えている。「工事のため多数の労務者が流入し、この中には生命知らずといわれる人々も多く、傷害事件等も多数発生したようである。これらに対応するため、警察では、蟹寺に巡査部長派出所を置いた」⁽¹⁴⁾。後述するように、この蟹寺（婦負郡細入村）で朝鮮人労働者の全国団体・相愛会富山県支部が設立されたのが1926（大正15）年のことであった。この創立大会には、日本電力工事場の朝鮮の労働者約800人が参加した⁽¹⁵⁾。

大正期に入つて神通川の支流に建設されたのが旧八尾町（現富山市）獵師ヶ原、滝の坂、久婦須川第一の発電所である⁽¹⁶⁾。このうち久婦須川第一発電所（水路式）は、飛越電気株式会社が大正12年に着工し、同14年に完成させたもので、出力2052kw導水路2768.12mを備え、当時 笹津変電所（旧大沢野町、現富山市）へ送電していた⁽¹⁷⁾。続いて昭和10年代に薄島、久婦須川第二発電所が建設された。『続八尾町史』巻末年表には、「1925年11月 久婦須川第一発電所ができた」、「1941年11月 久婦須川第二発電所ができた」とある⁽¹⁸⁾。

（2）常願寺川水系

常願寺川水系では、世にいう安政5年の大洪水が有名である。このとき「常願寺川も一気に沿岸耕地と同一地盤となり、両岸の新川平野は一面の泥海と化した」⁽¹⁹⁾といわれている。その後の「明

(10) 前掲『細入村史 通史編』463頁

(11) 1戸に3部屋分の電灯を要望し、30戸で計90灯、街灯と社寺の分を10灯と想定した。

(12) 前掲『細入村史 通史編』465頁

(13) 前掲『細入村史 通史編』467頁

(14) 前掲『細入村史 通史編』469頁

(15) 前掲『富山県史 近代下』944頁

(16) 『続八尾町史』八尾町、1973年、4頁

(17) 前掲『続八尾町史』296頁

(18) 前掲『続八尾町史』1109頁

(19) 『立山町史 下巻』立山町、1984年、948頁

治15年以來24年までの10年間に8回の破堤をみた」⁽²⁰⁾ のだが、當時富山県は、「黒部川と庄川は、とりあえず復旧工事にとどめ、常願寺川の改修に全力を注いだ」⁽²¹⁾。1891(明治24)年12月から常願寺川の河身を改修し、新堤を築き、1893(明治26)年6月に完成疎水式を行った。大正に入ると常願寺川水系の富山県営発電所が有峰(富山市)に計画された。富山県は発電所建設後、「水源地になると予想される、……有峰民有林1万400町歩を1920(大正9)年に買収し、その地域の伐採を全面禁止」⁽²²⁾した。次いで富山～千垣間に19.5kmの鉄道を敷設するため、同年11月から工事を始め、1923(大正12)年4月までに蒸気鉄道を開通させた。これは国有鉄道と発電所との物資輸送と交通の便を図るものだった。第1次事業の発電所建設は、旧大山町(現富山市)上滝・松ノ木・中地山の3か所で、1921(大正10)年11月から工事に着手し、電力の一部は県営電車運転用として、残りは1923(大正12)年4月から日本電力株式会社へ送電した。

1922(大正11)年12月、当時の伊東喜八郎富山県知事は、通常県会に諮詢を行い、今後の県営発電事業の施政方針を述べている。この時は常願寺川水系の発電所計画を中心であったがその後、1925(大正14)年12月、岡正雄知事の県営発電事業の新改定計画案により、県会は、常願寺川水系真川発電所のみの工事起工と黒部川水系発電の改定事業計画を決定した。1925(大正14)年の県会が常願寺川水系真川発電所工事を決定し、その基礎強化のために鉄道電化工事を実施、1927(昭和2)年6月に電車運転が開始され、同年5月真川発電所工事に着手し、日本海電力株式会社に送電を開始した⁽²³⁾。ただ、財源事情で一時見送られた小見発電所は1932(昭和7)年に、称名川第二発電所工事は1933(昭和8)年にそれぞれ工事が竣工し、やはり日本海電力株式会社へ送電が開始された⁽²⁴⁾。

一方、有峰の電源開発は測量班が調査した結果、莫大な工費が必要とされ、「その負担が困難であり、また、経済界も不況の時期にあったので実現を見るにいたらなかった」⁽²⁵⁾が、1937(昭和12)年、佐藤工業(株)により猫幅ダム地点の基礎掘削が開始され、有峰は40数人の電気局員と数百人の作業員で賑わった。翌1938(昭和13年)には有峰と和田川は佐藤工業、大品山は加藤組、真川第二は佐藤工業と加藤組が担当し、発電所建設が着工された。ところが戦時下の「電気国策要綱」によって、5千kwを超す発電所は、日本発送電株式会社(以下、日発と略記)に移管されることになり、有峰と四つの発電所は1942(昭和17)年6月にすべて日発に引き継がれた。その上、「戦争の苛烈と局面の急変によって昭和18年(1943)9月、全工事は中止となり、工事用機械器具、仮設備の撤去が始められ、20年(1945)末までにこれを終了した」⁽²⁶⁾。1943(昭和18)年9月、全工事の中止時期までの工事の進捗具合は、ダム基礎掘削16万3千m³(34%)、コンクリート打設13万8千m³(34%)、有峰発電所47%、大品発電所27%、真川発電所49%と記録されている。そ

(20) 前掲『立山町史 下巻』948頁

(21) 前掲『立山町史 下巻』951頁

(22) 『大山の歴史』大山町、1990年、676頁

(23) 前掲『大山の歴史』677頁

(24) 前掲『大山の歴史』678頁

(25) 前掲『大山の歴史』682頁

(26) 前掲『大山の歴史』683頁

して有峰ダムの建設は戦後、再開された⁽²⁷⁾。

(3) 庄川水系

岐阜県大野郡莊川村の山中、烏帽子岳北東山中峠付近に源流をもつ庄川は、支流が多く、飛騨高山山地を侵食して広く谷盆地が開けている。富山県に入ると西赤尾・皆葎・上梨・下梨では段丘地形を示す小さな谷盆地となり、その下流は峡谷状となり旧庄川町（現砺波市）小牧に至る。小牧から下流は砺波平野に出て日本海に注ぐ。延長132km、流域面積約1300km²、御母衣ダムから下流の庄川合口ダムまでの河川勾配は、平均120分の1の急河川である。庄川水系で最も早く開発されたのは、庄川の支流・大白川の平瀬発電所であり、1926（大正15）年に運転を開始した⁽²⁸⁾。建設現場の労働者についてはほとんど記載がないが、僅かに平瀬発電所の完成まで「就役人夫17万4千人」を要した⁽²⁹⁾とある。一方、庄川本流で最初に開発されたのが小牧発電所である。小牧発電所は1916（大正5）年5月に水利利用許可を出願し、1919（大正8）年9月に庄川水力電気株式会社（社長：浅野総一郎）が設立され、東山見村（旧庄川町、現砺波市）での発電計画が当初、最大出力4万4800kwであったものを後に7万2千kwに計画は拡大された⁽³⁰⁾。小牧ダムは地元1市3郡50余町村の灌漑用水に影響することから広範に反対運動が起き、「庄川問題」⁽³¹⁾として歴史に残っている。その小牧ダムの完成は1930（昭和5）年11月にずれこんだ。小牧ダムはアーチ型重力式コンクリートでできており、堤高79.2m 堤頂長300.8m 堤体積約30万m³であった。これは当時アジア最大の大ダムであり、出力も7万2千kwの日本最大のものだった⁽³²⁾。それゆえ、「この工事の規模の雄大さは当時東洋一と称せられた」⁽³³⁾という。

これに続いて、昭和電力（株）によって祖山発電所が稼働する。郷土史本の庄川水系発電設備概要是、先の発電所のほか、御母衣第一・第二、尾上、鳩谷、椿原、成出、小原、新祖山、大牧、中野、雄神、利賀川第一・第二、庄東第一・第二の各発電所を一覧にして掲載している⁽³⁴⁾。これらの発電開始は戦後の場合もあるが、戦前着手された工事も多い。このうち小原発電所は昭和電力（株）が水利権を保持していたが、電力統制により日発が工事を継承し、1942（昭和17）年12月に出力4万5千kwの発電所として完成させた。大牧発電所⁽³⁵⁾は1944（昭和19）年5月、日本水力工業（株）によって完成した。成出発電所は小原発電所の完成に引き続いて着工になったが、「太平洋戦

(27) 戦後、1950（昭和25）年に日発と9配電会社は解散し、9電力会社が編成され、昭和34年に北陸電力の主導で有峰第一次ダムの湛水が開始され、翌年8月にダムコンクリート全量の打設を完了した。こうして常願寺川沿線に6発電所（折立、和田第一・第二、新中地山、小俣ダム、小俣の各発電所）が稼働し、25万kwの出力によって農業用水、上下水道、治水、観光に寄与することになった。前掲『大山の歴史』687頁

(28) 『庄川町史 下巻』1975年、446頁

(29) 前掲『庄川町史 下巻』448頁

(30) 前掲『庄川町史 下巻』413頁

(31) 前掲『庄川町史 下巻』438-444頁、『富山県史 近代下 史料編VII』富山県、1982年、1065-1077頁

(32) 土木学会 土木史研究委員会編『日本の近代土木遺産〔改訂版〕』社団法人土木学会、2005年、154-155頁。
北河大次郎・後藤治編『図説 日本の近代化遺産』河出書房新社、2007年、111頁

(33) 前掲『庄川町史 下巻』449頁

(34) 前掲『庄川町史 下巻』450-451頁、表9

(35) 庄川の支流利賀川から取水して、大牧温泉下流で194mの落差を利用して建設された。

争も末期となり、工事の設計・監督に従事していた技術者の大半が出征し、現場作業員も日増しに戦場へ、また徵用工として軍需工場へ姿を消して行き、これに加えて工事用資材のセメント・鉄鋼類の入手が困難を極め、ついに20年6月工事を中止せざるを得なくなつた」⁽³⁶⁾と、資材の入手困難と従業員の圧倒的不足を記してはいるが、建設現場の朝鮮人労働者にはまったく言及しない。

(4) 黒部川水系

大正に入ると黒部川水系で電源開発が始まる。それは1914（大正3）年、三井鉱山が神岡鉱山用と電気工業用に奥鐘釣・東鐘釣・祖母谷・黒薙など5地点に約5万馬力の水利権を申請したことから始まる。この三井鉱山の黒部川水利権申請を受け継いだのが東洋アルミニナム株式会社（以下、東洋アルミニナムと略記）であった。東洋アルミニナムは、1917（大正6）年に発電計画を立て、社員の山田胖に黒部川奥地を調査させ、水利権を申請した。1920（大正9）年に水利権の認可を受けた東洋アルミニナムは本格的に電源開発に乗り出し、柳河原発電所（旧宇奈月町、現黒部市）を計画した。同年、建設準備の資材運搬用に黒部鉄道敷設許可を申請し、1921（大正10）年に免許を得た。ところがその頃、米国のアルミニウム業界が生産過剰に陥り、東洋アルミニナムへの出資が不可能となり、計画は頓挫した。この東洋アルミニナムの水利権を継承したのが日本電力であり、地元と協力し黒部鉄道株式会社を設立し、1922（大正11）年に鉄道を現在の黒部市三日市～宇奈月町下立間、翌年は宇奈月温泉にまで開通させた。また電車の動力、柳河原発電所の建設用動力、宇奈月温泉街電力の使用目的に弥太蔵発電所を建設し、宇奈月～猫又間の軌道開削工事も並行して行った⁽³⁷⁾。

こうした準備をへて1924（大正13）年6月、日本電力の柳河原発電所（いわゆる黒部第一発電所、以下、黒一と略す場合がある）が確定し、建設が始まった。ダムの取水口は猫又と支流の黒薙川に、発電所を愛本村音沢尾瀬馬谷に設定して断崖絶壁の両岸を開削する軌道工事は難渋を極めたが、1925（大正14）年末には猫又まで軌道車が通るようになった。発電所工事は1926（大正15）年春から始まり、1927（昭和2）年暮れに一部発電を開始し、翌1928（昭和3）年暮れに完成した⁽³⁸⁾。

一方、黒部川水系の富山県営発電事業では、1925（大正14）年12月の新改定計画案で黒薙、柳又両発電所が起工されるはずであったが、雪崩、流水その他の調査不足から電力供給が見込めず延期されていた。その後1929（昭和4）年に山中恒三知事の変更案が県会で可決され、愛本・柳又・黒薙などの県営発電事業が決定された。しかし、当時の金融恐慌、大恐慌など経済不況と自然保護運動の影響もあって県営愛本発電所の工事が開始されたのは1933（昭和8）年になってからである。黒部川水系に関する郷土史本の記述・記録については後述する。

以上のように富山県における電源開発は明治中期に始まり、大正末から昭和初期に発電所建設が本格化した。こうした状況下で植民地朝鮮から大量の朝鮮人が動員されたわけだが、その概要は次の通りである。

事実上、日清戦争で朝鮮侵略を成功させた日本は1905（明治38）年の韓国保護条約で朝鮮の外

(36) 前掲『庄川町史 下巻』453頁

(37) 『追録宇奈月町史 歴史編』宇奈月町、1989年、371頁

(38) 前掲『追録宇奈月町史 歴史編』372頁

交権を奪い、実質植民地化した。その後も抗日義兵を鎮圧して1910年に完全に併合した後、日本はまず朝鮮で土地調査事業と産米増産計画を実施したため、朝鮮の農民は土地を失い、国内で生活できなくなった。そうした祖国で離農せざるを得なくなつた朝鮮人が大量に渡日した。日本は第一次世界大戦時、好況でもあり、雇用があった。この好況が呼び水となって1920年代後半から1930年代にかけて毎年8万から15万人の朝鮮人が渡日したといわれている。そして、1930年に入つて、日本のアジア侵略が本格化し、それとともに朝鮮人は日本人が危険を避けて嫌がる炭鉱や鉱山、軍需工場や土木工事に就労せざるをえなくなった。さらに戦争による徴用、徴兵もあり72万人以上が強制動員された⁽³⁹⁾。終戦時、日本には210万人が、富山県には2万人の朝鮮人がいたといわれる。

このように侵略戦争を続ける日本では朝鮮人労働力が軍需産業に必須とされた。植民地朝鮮と富山の関係は、富山から朝鮮入りした富山県人の増加でもその一端がわかるが⁽⁴⁰⁾、一方、植民地朝鮮から富山県への動員は1926（大正15）年2月時点で各種土木工事が活発化したことにより、日電水力工事、小牧ダム工事、神通川改修工事に従事する朝鮮人労働者が少なくとも3千人はいるだろうと推定された⁽⁴¹⁾。尚、当時の内務省などの集計では、1926年3,375人が以後1932（昭和7）年まで漸減し、同年が875人と統計上は最低を記録している。その後は漸増し、1935（昭和10）年に1,641人、1938（昭和13）年に3,056人と再び3千人を超した。そして最大に達するのは1940（昭和15）年の3,876人である⁽⁴²⁾。

3 電源開発建設現場の事故による朝鮮人労働者の犠牲

次に河川水系の建設現場における朝鮮人労働者が犠牲となった事故の実態をみていくことにする。その場合、『黒部・底方の声』三章（内田）の調査記録を基本としつつ、富山近代史研究会編『富山県戦時下朝鮮人強制連行関係資料目録』（1998年）及び前掲の広瀬貞三「戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者」で確認、補足した。

(39) 戦時徴用令（1944年）、朝鮮に対する徴兵制実施（同年）による。

(40) 外交権が奪われた韓国朝鮮であったが、1910年の併合前、1907（明治40）年の「富山出テ在朝鮮」の富山県人は、1,265人である。韓国併合の1910年8月31日の記事は、富山日報社が主催して「併合」祝賀会を開いている様を報じている。『二千の市民みな肅然、ともにはるかに盛儀を賀す』とし、演壇で「韓国は往生したが、更に朝鮮として蘇生した」と演説したと報道している。翌1911年の「富山出テ在朝鮮」の富山県人は、1,691人と増加した。この時期、富山県下で『東拓移民募集』が宣伝され、1915年11月には、『東拓第6回移民募集』が行われた〔以上は内田すえの、此川純子、堀内節子『黒部・底方の声——黒三ダムと朝鮮人』桂書房、1992年、「三章 富山県における朝鮮人労働者」（内田）による〕。加えて忘れてならないのは1914（大正3）年4月から韓國駐箚軍部隊として第九師団が単独で派遣されたことである（『地域のなかの軍隊7植民地』吉川弘文館、2015年、170頁）。第九師団には富山出身者の歩兵第69連隊が所属している。派遣直前の1913年12月30日の記事は、『朝鮮行くと増俸』第九師団、朝鮮駐箚の間は月俸、1/3～1/5割増支給とある。翌1914年4月8日は、『第九師団歩兵第69連隊1,600名、渡鮮す』一大々的歓送迎会と報道され、1916年には帰還した。1918年の「富山出テ在朝鮮」の富山県人は、1,628人、1928年には2千を超え、2,002人。満州事変を起こし「満州国」建国後の1938年には3,942人とピークを記録した。

(41) 広瀬貞三「戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者」（13）

(42) 前掲『黒部・底方の声』三章（内田）<表7>富山県における朝鮮人の職業、220頁。朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』（三一書房、1975-76）の第1巻299頁、第2巻1380頁、第3巻付表1441頁、第4巻付表943頁、第4巻508頁及び同巻付表1117頁による。

(1) 神通川水系

年	月日	
1917 (T6)	10月24日	朝鮮人、ダイナマ爆発で指1本切断——庵谷拡張工事場（富山電気（株））
1924 (T13)	8月15日	相愛会富山県支部発会式、細入村蟹寺において
1924 (T13)	10月19日	細入軍人青年団の4日間にわたる大捜査で、暴行朝鮮人及共犯朝鮮人5名、逮捕
1925 (T14)	2月10日	蟹寺日電工事場解雇になった朝鮮人50名、朝鮮から本県で働く為にやってきたばかりの12名、富山駅前で路頭に迷う。巡査の手で、笹津工事場へ送られる。
1925 (T14)	2月20日	『発電工事場に鮮人過剰、いつ椿事発生するかと大警戒』蟹寺発電工事八分通り完成につき、1,300人の朝鮮人土工、850人に漸次減少の見込み
1929 (S4)	1月11日	『飛越線八尾－笹津間隧道掘削工事の裏面に潜む一大怪事』一昨年、坑道崩壊し4人の朝鮮人土工生埋め、掘り出すにも更なる崩壊の危険あり、莫大な費用かかる——『かかる工事にありがちの犠牲者として救助作業もせず生埋めのまま放置した。4人の遺族には弔慰金贈って、本件を秘密に附してきたと、鉄道省長岡建設事務所笹津出張所所員、不用意にもらす。警察、俄然緊張す』と。

(2) 常願寺川水系

年	月日	
1923 (T12)	6月12日	朝鮮人土工、感電即死。常願寺川、大山村和田川県電工事場
1923 (T12)	12月8日	『朝鮮美人の惨死』、大山村、第一電力工事場、水道鉄管用支柱落下
1927 (S2)	8月11日	朝鮮人土工、ダイナマ爆破で即死、大山村栗巣野県営水電工事場、加藤組配下
1927 (S2)	12月11日	朝鮮人労働者ダイナマイト爆破し惨死、大山村県営水電工事場

(3) 庄川水系

年	月日	
1925 (T14)	10月29日	岩石満載したトロッコが頭上落下、朝鮮人土工惨死、庄川水電工事場
1926 (T15)	5月9日	大岩盤落下、朝鮮人土工惨死、庄川水電工事場
1927 (S2)	8月11日	加藤組の李在甲（29歳）はダイナマイトが爆発し、即死
1928 (S3)	5月13日	李沫正と李孟鏡兄弟は作業中、弟の李孟鏡が採取機械の上に墜落し、死亡

(4) 黒部川水系

最後に黒部川水系をみると、これまでみてきた神通川、常願寺川、庄川の各水系に比べて事故の件数及び犠牲者数が膨大である。今まで明らかになっているものを【表1】にまとめた。この場合例えれば、1935（昭和10）年4月2日の「土工4名生埋め内死亡1」の報道は、生埋めで死亡1は明白だとしても、残る3名を重軽傷者に計上するべきか判断に迷うところである。本稿では推定として黒部川水系の犠牲者の合計は、死亡91、重軽傷者47とみる。

【表1】黒部川水系 事故

年	月日	重体・慘死人数	場所	会社・現場など	配下
1923 (T12)	10月 6日	墜落、重体 1	愛本村	東洋アルミナム水電工事場	佐藤組
1925 (T14)	7月 14日	岩石墜落、土工慘死 1	愛本村	柳河原東洋アルミナム(株) 水電工事場	佐藤組
1926 (T15)	2月 25日	土砂崩壊、土工慘死 2	黒部奥山	柳河原発電工事場	日本工業
1926 (T15)	5月 26日	土砂崩壊、土工慘死 1	黒部奥山	柳河原発電工事場	日本工業
1926 (T15)	12月 8日	大岩石落下、土工慘死 1	愛本村	日電黒部工事場	佐藤組
1927 (S2)	1月 29日	雪崩 5	黒部奥山大谷	日電飯場	
1927 (S2)	2月 15日	雪崩 5	黒部奥山清水	日本工業(株) 飯場	
1927 (S2)	2月 16日	屍体 1	黒部川		
1927 (S2)	10月 20日	トロッコの下敷・日鮮 2名 慘死	黒部奥	日電工事	
1928 (S3)	7月 3日	土工墜落死 1	黒部奥山猿廻		
1934 (S9)	7月 30日	工夫墜落死 2	黒部奥山鐘釣平	日電工事場	
1935 (S10)	4月 2日	土工 4名生埋め内死亡 1	猫又	日電発電工事場	大倉組
1935 (S10)	7月 21日	土工 2名ゴンドラと衝突墜落慘死	黒部奥山小屋平	日電第二期工事場	村上組
1935 (S10)	9月 3日	土工 3名重軽傷、ダイナマ爆発	黒部奥山鐘釣平	日電第二発電工事場	村上組
1935 (S10)	12月 3日	4名ダイナマイト爆発重傷		県営愛本発電工事場	佐藤組
1936 (S11)	1月 30日	大雪崩土工妻惨死 1		愛本発電工事場	佐藤組
1936 (S11)	2月 17日	土工下敷重傷 1	愛本村	県営発電所堰堤工事場	佐藤組
1937 (S12)	7月 20日	ダイナマ爆発土工即死 1、 重軽傷 3	黒部奥山志合谷先	日電第三工事場	
1938 (S13)	5月 31日	岩石下敷、土工慘死 1	黒部奥山	日電工事場	佐藤組
1938 (S13)	7月 11日	爆薬で死傷 4、死亡 2	黒部奥山阿曾原地内		
1938 (S13)	7月 17日	土工断崖から墜落即死 1	黒部奥山水平地内		佐藤組
1938 (S13)	8月 5日	土工、歯車に巻込まれ即死 1	奥山シジミ谷	日電第三期発電工事場	大林組
1938 (S13)	8月 22日	ダイナマ爆発土工、重軽傷 7	黒部奥山	日電隧道工事(高熱隧道)	佐藤組喜多
1938 (S13)	8月 28日	ダイナマ爆発死亡 6 重傷 4	黒部奥山阿曾原	日電第三期発電隧道工事場	
1938 (S13)	12月 27日	雪崩死亡 37、重傷 1	奥黒部仕合谷		
1939 (S14)	3月 7日	雪崩 死亡 2	黒部奥山櫻平	日電工事場	
1940 (S15)	1月 9日	雪崩 死亡 17、重軽傷者 21	阿曾原		
死者／重軽傷者		91 / 47			

注) T : 大正, S : 昭和

4 黒部川水系における朝鮮人労働者の存在と自治体刊・郷土史本の記述・記録

これまでみたように電源開発現場における朝鮮人労働者の実態を記述・記録した自治体刊・郷土史本はみあたらない。当然、犠牲となった死者、重軽傷者の実数もそれらのすべてで不記載であった。ただ、その場合も次の傾向を指摘した上で、黒部川水系を論じることにする。

- (ア) 電源開発の建設計画、進捗状況及び工事現場を記述・記録しない。1969年刊『宇奈月町史』⁽⁴³⁾
- (イ) 電源開発の建設計画、進捗状況を記述するが、工事現場に一切言及しない。1973年刊『続八尾町史』
- (ウ) 電源開発の建設計画、進捗状況及び工事現場を記述・記録するが、事故には一切言及しない。1990年刊『大山の歴史』
- (エ) 電源開発の建設計画、進捗状況及び工事現場、さらに事故を伝えるが朝鮮人労働者には一切言及しない。1989年刊『追録 宇奈月町史 歴史編』

(1) 黒部川水系と『追録 宇奈月町史 歴史編』の場合

黒部第二発電所及び第三発電所の過酷な就労現場は“生き地獄”的な様相を示し、当時の新聞では頻々と労働災害の報が伝えられたが（【資料1】）⁽⁴⁴⁾、【表2】（資料1の紙面から、「所属」「生存者」「死者」「生死不明」「負傷者」を解読したもの）にみると朝鮮人労働者の出身地、氏名が大量に報じられている。そうした多発する工事場事故に対し、富山県当局や富山県警も工事会社に警告を発していた。

平成に入って公刊された『追録 宇奈月町史』は、「歴史編」「文化編」「自然編」と分野別にして詳しく叙述している。その「歴史編」第四章近代・現代の第八節二、雪崩の箇所で戦前の3つの雪崩の大事故の概要を次のように丁寧に紹介している。

- 1927（昭和2）年、出し大谷の雪崩事故 死者34名（男14名、女10名、男児7名、女児3名）
出しの清水の死者 男4名 合計38名
- 1938（昭和13）年、志合谷の遭難者 生存者47 死者36 生死不明47 負傷者9 計139 ※
後に死亡者は84名であることが判明した（生存者の1人の談）（富山日報 昭13・12・29）【資料1】【表2】
- 1940（昭和15）年、阿曾原の雪崩 死者28名 重軽傷者35名

ところが、『追録 宇奈月町史 歴史編』には、死者、行方不明者、負傷者の具体的氏名や出身地がどこにも記載されていない。朝鮮人労働者とその家族がいたことが全く伝えられていないのである。【資料1】をみれば一目瞭然であるにもかかわらずに、である。そして残念ながらこの傾向は

(43) 『宇奈月町史』のあとがきをみると、編集担当者が長く入院されたとか慌ただしい編集体制で発刊に漕ぎ切っている。そのためか黒部奥山で起きた雪崩事故なども年表に1行を記すだけで終わっている。

(44) 「黒部仕合谷の大なだれ遭難続報」『富山日報』1938（昭和13）年12月29日

その後も公的あるいは民間文書に受け継がれている⁽⁴⁵⁾。旧宇奈月町が設立した歴史民俗資料館は現在、黒部市教育委員会の所轄で運営されており、2013（平成25）年10月から翌2014年3月までの半年間、第9回特別展「開湯90年宇奈月温泉の歴史を辿る」を開催した。そのときのパンフレット2頁は、「2 電源開発のあゆみ」を次のようにまとめている。

高峰譲吉博士の下、アルミニウム製造を目的に1919（大正8年）、東洋アルミナム（株）が設立され、翌年黒部川の電源開発に乗り出す。が、第一大戦後不況と高峰博士の死去で計画は一時とん挫する。その後、日本電力が東洋アルミナム（株）の経営権を握り、1924（大正13）年に柳河原発電所（黒一）の建設に着手した。黒一は、1928（昭和3）年に完成し、黒部川第二発電所（以下、黒二）の工事は1933（昭和8）年に再開され、1936（昭和11）年から運転を開始した。黒部川第三発電所（以下、黒三）は1936（昭和11）年9月に工事を開始し、1940（昭和15）年運転を開始し、電力を供給した。黒三では、黒二以上に景観風致の調整に苦労した等の説明があるものの、パンフレットの解説文は、工事現場の実態などに全く言及していない。

次に民間研究団体の富山近代史研究会が2014（平成26）年に編集発行した『歴史と観光 富山近代史の視座』（山川出版社）という単行本をみておく。ここでは次にみるように黒部川の電源開発の歴史をたどりながら、しかし朝鮮人労働者には全くふれない書物である。本書の第Ⅲ章は、

【資料1】『富山日報』1938（昭和13）年12月29日



(45) 志合谷の事故を題材にした吉村昭『高熱隧道』（新潮文庫、1975年）も作者の意図もあってか韓国・朝鮮に関わる事項を全部除いている。

【表2】資料1「黒部仕（志）合谷の大なだれ遭難続報」より

所属	生存者	死者	生死不明	負傷者
日本電力社員		赤坂善蔵（秋田県平鹿郡横手町）		龜澤文助（下新川郡宇奈月日電出張所）
		斎藤		
		舟川平作（下新川郡下立村）		
佐藤組組員		今村保太郎（東砺波郡柳瀬村東開発）		
		山本健二（同郡同村柳瀬）		
		林順朔（同郡般若村頼成）		
		岩崎有二（同郡井波町）		
		山田倉六右衛門（下新川郡内山村内山）		
喜田元部屋	山森正雄（東砺波郡雄神村三釜）	宮○外次郎 50（東砺波郡庄下村）	今村昇市 21（東砺波郡梅檀野村正○村）	
	山本達郎（東砺波郡東般若村宮森）			
	上田五一郎（東砺波郡南般若村千保）			
	田島次作（東砺波郡柳瀬村柳瀬）			
	林與作（下新川郡小摺戸村）			
喜田・菊本飯場	富永寅重（愛媛県）	菊本泰蔵 45（奈良県吉野郡白銀村）	千葉○純 37（秋田県仙北郡生保内村）	長谷川富太郎 46（福井県大野郡上穴島村）
	外崎邦雄（弘前市）	本郷富永 44（東砺波郡般若村常園）	澤井菊五郎 30（新潟県中頸城郡里五十公村）	中西喜代治 27（中新川郡東谷村大尾）
	大上権一（長野県）	李元直 49（朝鮮慶尚北道）	山口清重 29（東京市葛飾区青戸町）	米澤精逸 37（下新川郡内山村内山）
	大辻兼次郎（長野県）	善仁金 41（朝鮮慶尚南道）	坂本央 42（熊本県菊池郡清泉村）	三浦辰五郎 23（群馬県北甘楽郡富岡町）
	富永重雄（愛知県）	元七成 47（朝鮮京畿道城重郡杭榮西道）	伊藤元蔵 33（山形県西置賜部○原村）	
	石井義一（千葉県）	李商翠 24（朝鮮忠北永洞郡黄金西溪記）	吉野茂（射水郡塚原村川口）	
	康故俊（朝鮮慶尚南道蜜陽郡）	姜用床 34（朝鮮慶尚北道）	徐外世 39（朝鮮慶尚南道蜜陽郡）	
	徐海廬（朝鮮慶尚南道蜜陽郡）		鄭小介 29（朝鮮慶尚南道）	
	金太守（朝鮮慶尚南道蜜陽郡）		巖翠仲 40（朝鮮慶尚南道）	
	朴基平（朝鮮忠清南道）		李範伊 44（朝鮮慶尚北道）	
	崔壽鳳（朝鮮慶尚南道）		許永出 24（朝鮮慶尚南道宜○郡）	

所属	生存者	死者	生死不明	負傷者
	鄭光時（朝鮮慶尚南道）		金鳳永 29（朝鮮慶尚南道）	
	崔奉吉（朝鮮全羅南道）		李康佑 33（朝鮮慶尚南道）	
			閔大根 31（朝鮮忠北永洞郡）	
			朴用元 49（朝鮮慶尚北道）	
			鄭三守 31（朝鮮慶尚北道）	
			南石○ 37（朝鮮慶尚北道）	
			○順五 39（朝鮮忠清南道○郡）	
喜田・金井飯場	伊藤文三 29（中新川郡宮川村）	卜泰用 31（朝鮮慶尚南道）	鶴井作次郎 47（下新川郡上中島村）	澤田新 21（中新川郡五百石町松本開）
	黒田茂一 24（中新川郡宮川村）	卜二鐘 38（朝鮮慶尚南道）	茅野彌左衛門（上新川郡堀川町）	
	金甲緑（朝鮮慶尚北道）	文福德 23（朝鮮慶尚北道）	金命右 37（朝鮮慶尚南道居昌郡）	
	金大釜（朝鮮慶尚北道）	金章徳 28（朝鮮慶尚北道）	杉本恒太朗 37（鳥取県西伯郡）	
	白永李 17（朝鮮慶尚南道）	西徳守（朝鮮慶尚北道）	金子富之 20（福島県大沼郡人澤高田町）	
	白鳳基（朝鮮慶尚南道）	李八丸 28（朝鮮慶尚南道）	章乾文 27（朝鮮）	
	金○（朝鮮慶尚南道）	李正成 29（朝鮮慶尚南道）	韓仁善 32（朝鮮慶尚北道）	
	李俊炳（朝鮮慶尚南道）	金玉福 25（朝鮮慶尚北道）	朴用永 30（朝鮮慶尚南道）	
	佐野榮 29（大分県大分郡）	金海丸 42（朝鮮慶尚南道）	申判日 25（朝鮮慶尚南道）	
	李在根（朝鮮忠清北道永洞郡）	尹道也之 36（朝鮮慶尚北道）	尹又植 21（朝鮮慶尚北道）	
	朴鐘基 19（朝鮮慶尚南道）	李俊京 18（朝鮮慶尚北道）	崔用○ 42（朝鮮平安南道）	
	高井春雄 23（中新川郡下段村）	金炳又 38（朝鮮慶尚北道）	新渡邊信之 19（中新川郡高野村金剛）	
	碓井春雄 19（中新川郡上段村日中）	朴来仁（朝鮮慶尚北道）	野越仙松 27（中新川郡下段村榎町）	
			村上石次郎 38（中新川郡五百石町松本○）	
			柄山承松 26（中新川郡五百石町松本開）	
			柄山 52 德三郎（中新川郡五百石町松本開）	
大工	田中八郎兵衛 41（東砺波郡雄神村）	山本勝平 31（東砺波郡雄神村）		

所属	生存者	死者	生死不明	負傷者
	森田清 29（東砺波郡雄神村）	上腰榮次（不明）		
運転夫・機械職夫	野村作平 46（東砺波郡東野尻村）	土佐初太郎（射水郡黒河村）	植松茂二 29（中新川郡濱加積村高塚）	植松記老 29（中新川郡濱加積村）
	植松次郎吉 53（中新川郡濱加積村高塚）	松平好森 19（下新川郡内山村）	福田吉男 24（西砺波郡林村小杉）	
	中西茂成（下新川郡内山村）		田中勝之 21（下新川郡内山村宇奈月）	
	戸出喜久三（下新川郡内山村）		島崎正治 19（上新川郡東岩瀬町袋町）	
			木原嘉一郎 18（下新川郡内山村）	
			杉本達治 28（下新川郡下立村）	
			土佐藏治 28（射水郡黒河村）	
			山田○作 19（下新川郡内山村）	
			廣永浅一（下新川郡内山村）	
炊事係	望月富治（長野県）	古川ツヤ 39（下新川郡舟見町）	—— 54（長野県西筑慶郡奈川村）	中田文泰 18（朝鮮慶尚南道）
	鍋島秀三 25（下新川郡新屋下山）			
	菊本玉子（奈良県吉野郡）			
	長谷川姫（福井県大野郡）			

注) ○は不明、数字は年齢だが判読不能も多い。 [2020年12月の作業を基本にしている]

「富山の歴史創造」と銘打ち、世界遺産・五箇山合掌集落、おわら風の盆と並んで電源開発と黒部峡谷を次のように概説する。「戦時体制へ向かう時局に電力需要が高まるなか、日本電力は黒部川の第三発電所建設に取組み、昭和11年9月に着工。同15年、櫻平地内に最大出力8万1千kw（の）……大規模な水力発電所が完成した。……険しい峡谷にそって調査歩道の開削や資料輸送路建設などは厳しい自然環境のもとでの作業であった。……これらは吉村昭の『高熱隧道』に描かれている」⁽⁴⁶⁾として電源労働者の就労実態に踏み込みます、犠牲者については、昭和13年12月の志合谷の事故で、「表層雪崩による宿舎倒壊で84人が犠牲に」⁽⁴⁷⁾なったと記すが、どういう人たちが犠牲になったのか全く明らかにしない（【表2】参照）。84人のうち37人が朝鮮人であり、当時の新聞見出しでは“半島人”と書いているのだが。

つまり宇奈月町が公刊した郷土史本、合併して黒部市になりその教育委員会が作成したパンフ

(46) 富山近代史研究会編『歴史と観光』山川出版社、2014年、96頁

(47) 前掲『歴史と観光』96頁

レット、富山の近代史研究を掲げる団体の書籍のいずれもが、黒部奥山の電源開発に従事し、多数が犠牲となった朝鮮人労働者にふれようとしない実態が明らかになったといえる。

(2) 宇奈月における朝鮮人を記述・記録した文献

ただし、黒部川の工事現場における朝鮮人の記述、記録が全くなかったというわけではない。多数とはいえないが、富山県関係者の戦後の刊行物が、2000（平成12）年までに9点発行されている。また、電源工事場の朝鮮人労働者の子女と思われる児童が地元の小学校を卒業していることも、『宇奈月町立宇奈月小学校閉校記念誌』（2006年）掲載の卒業生名簿からわかる。さらに富山県外の執筆者による刊行物も相当数あると思われるが、筆者の目にとまったものは、(a)～(c)の3点である。

それを次に掲げる。またそれぞれから一部を抜き出した摘要を卷末【資料2】とする⁽⁴⁸⁾。

- ①瓜生俊教『富山県警察史 上巻』富山県警本部、1965年
- ②奥田淳爾論文「黒部川水系の発電事業」（下）『富山史壇』第49号、1971年、29頁
- ③内山弘正『富山県戦前社会運動史』1983年
- ④富山県『富山県史 通史編VI近代下』1984年
- ⑤館全鏡、佐藤喜一「黒部開発／温泉開発 萬靈之塔縁起」1987年⁽⁴⁹⁾
- ⑥内山弘正『富山県戦前社会運動史 補遺訂正』1987年
- ⑦此川・堀江・内田共著『黒部・底方の声』桂書房、1992年
- ⑧富山近代史研究会編『富山県戦時下朝鮮人強制連行関係資料目録』1998年
- ⑨奥田淳爾『黒部奥山と扇状地の歴史』桂書房、2000年
- (a) 金泰燁『抗日朝鮮人の証言』不二出版、1984年
- (b) 村上兵衛『黒部川』関西電力、1989年
- (c) 清水弘『真説高熱隧道』北海道自然災害科学資料センター、1992年

5 朝鮮人労働者の存在と自治体刊・郷土史本の記述・記録について

冒頭で述べたように今回、調査検討した自治体刊・郷土史本は、次頁から掲載した【表3】「富山県内の自治体刊・郷土史本リスト」の58冊である。このなかで歴史用語を除いて戦前の植民地朝鮮あるいは朝鮮人労働者とその生活に関連して記述・記録しているものは、57頁の7冊であり、郷土史本リストの1割強、12%にとどまる。それぞれの項目も同頁の通りである。

(48) 2020年以降には、次の2冊が刊行されており、それぞれ貴重な資料である。堀江節子、中川美由紀、竹内康人『富山県・朝鮮人強制労働』コリア・プロジェクト@富山、2022年；堀江節子『黒三ダムと朝鮮人労働者』桂書房、2023年。ただし、前者には、内山の朝鮮人墓標に刻まれた数字に誤りがあり、後者は、昭和史セミナーが主張していない事項を載せている（64頁）。

(49) この縁起の作者は、薬師寺住職と門徒でつくる奉賛会の佐藤喜一會長（1923-1989）の連名であるが、調査の結果、佐藤会長の作と思われる。佐藤氏は、母親「サト」から受け継いだ宇奈月温泉街の小さな宿を、国際観光旅館・民藝の宿「さとのや」に拡張し、発展させた。当時の朝鮮人の生活を記録しているこの縁起は、地元住民が残した、ほとんど唯一の史（資）料で極めて貴重である。

【表3】 富山県内の自治体刊・郷土史本リスト

郷土史本名	出版年	出版者	著者
小杉町史	1959 (S34)	小杉町	
大島村史	1963 (S38)	大島村	
黒部市誌	1964 (S39)	黒部市 (旧)	
新湊市史	1964 (S39)	新湊市	
福野町史	1964 (S39)	福野町	
砺波市史 (通史編)	1965 (S40)	砺波市 (旧)	
婦中町史	1967 (S42)	婦中町	
八尾町史	1967 (S42)	八尾町	
入善町誌	1967 (S42)	入善町	
魚津市史 上巻	1968 (S43)	魚津市	
宇奈月町史	1969 (S44)	宇奈月町	
福岡町史	1969 (S44)	福岡町	
高岡市史 下巻	1969 (S44)	青林新社	高岡市史編纂委員会
上市町誌	1970 (S45)	上市町	
井波町史 上巻	1970 (S45)	井波町	
井波町史 下巻	1970 (S45)	井波町	
小矢部市史 下巻	1971 (S46)	小矢部市	
魚津市史 下巻	1972 (S47)	魚津市	
氷見百年史	1972 (S47)	氷見市	
続八尾町史	1973 (S48)	八尾町	
庄川町史 上巻	1975 (S50)	庄川町	
庄川町史 下巻	1975 (S50)	庄川町	
富山県史 近代上	1981 (S56)	富山県	
大門町史	1981 (S56)	大門町	
山田村史 下巻	1981 (S56)	山田村	
上平村誌	1982 (S57)	上平村	
新湊市史	1982 (S57)	大和学芸図書	新湊市史編纂委員会
富山県史 近代下	1983 (S58)	富山県	
朝日町誌 歴史編	1984 (S59)	朝日町	
山田村史 上巻	1984 (S59)	山田村	
砺波市史	1984 (S59)	国書刊行会	砺波市史編纂委員会
立山町史 下巻	1984 (S59)	立山町	
越中五箇山 平村史	1985 (S60)	平村	
滑川市史 通史編	1985 (S60)	滑川市	
下村史	1986 (S61)	下村	
富山市史 通史 下巻	1987 (S62)	富山市	
細入村史 通史編	1987 (S62)	細入村	
小杉町史	1988 (S63)	小杉町立図書館	
追録宇奈月町史 歴史編	1989 (H1)	宇奈月町	
大島町史	1989 (H1)	大島町	
入善町史 通史編	1990 (H2)	入善町	

郷土史本名	出版年	出版者	著者
大山の歴史	1990 (H2)	大山町	
福野町史 通史編	1991 (H3)	福野町	
新湊市史 近現代	1992 (H4)	新湊市	
井口村史 上巻 (通史編)	1995 (H7)	井口村	
婦中町史 通史編	1996 (H8)	婦中町	
小杉町史	1997 (H9)	小杉町	
庄川町史 続巻	2002 (H14)	庄川町	
小矢部市史ーおやべ風土記編ー	2002 (H14)	小矢部市	
城端町史	2004 (H16)	城端町	
大門町史 続刊	2005 (H17)	大門町	
利賀村史	2005 (H17)	利賀村	
下村史 続	2005 (H17)	下村	
氷見市 史通史編二	2006 (H18)	氷見市	
大沢野町史	2006 (H18)	大沢野町	
新上市町誌	2006 (H18)	上市町	
図説 魚津の歴史	2012 (H24)	魚津市教育委員会	
舟橋村史	2016 (H28)	舟橋村	

注) S : 昭和, H : 平成

『婦中町史』・朝鮮学校のこと

『婦中町史 通史編』・朝鮮人児童学院

『入善町史 通史編』・<銃後のくらし>強制連行された朝鮮人や中国人捕虜の酷い扱い

『庄川町史 続巻』・航空機生産用の地下工場建設工事

『富山県史 近代下』・労働相愛会富山支部結成に約 800 人参加・富山県白衣労働組合信友会・

第一ラミー紡績争議の解雇事件

『富山市史 通史 下巻』・第一ラミー紡績争議の解雇事件

『滑川市史 通史編』・メーデー参加団体に朝鮮労働総同盟

この 7 冊の記述・記録の特徴などを以下、簡単に報告する。婦中町史（1967 年）が「町のあゆみ」の章で 6. 「町のうつりかわり」にかかわり、10. 「教育のうつりかわり」の節で、終戦直後、民族学級で学んだ朝鮮人児童のことを「朝鮮学校のこと」の見出しで次のように記述しており、当時の婦中町史の編集担当者がどのような朝鮮認識を持っていたかがわかる。「明治 43 年、わが国と朝鮮は合併以来、着々朝鮮と融和の面をたどり、教育も普及の段階に達した。昭和 11 年から内鮮一体の教育となり、内地では共学していた。ところがわが国の敗戦とともに、連合国軍政下に朝鮮は独立した。ために内地在住の朝鮮人は、あだかも戦勝国民のようになった。したがって教育面においても、これまで、八尾・速星の両国民学校に共学していた朝鮮児童は、朝鮮人連盟の方針によって、これらの児童を収容する朝鮮人学校を速星に設けたいと、昭和 22 年 4 月、婦中町長と学校長に対し申入れ、速星国民学校の一部を解放するよう交渉を重ねた。結果、朝鮮側の学校のでき

るまで暫定的に、同校の1年生の放課後その一教室を解放することとしたが、8月、町の一角（四方屋料理店の東向い）にバラック造りの学校を新築し、両地区の児童21人ほどに朝鮮人教師2人が来て開校した。祝賀式には東京・富山・榎原（細入村）などから連盟の幹部が来会、朝鮮の余興」なども行ない盛大であった。敗戦直後の一コマである⁽⁵⁰⁾。

それから約30年後に出版された『婦中町史 通史編』は、第5章婦中の近現代第17節学校教育の充実（六）終戦と教育の大転換＜混迷の日々と教育方針大転換＞のなかで、「『8月15日以後の教育方針』はますます国体の護持に努めると共に軍国的思想及び施策を払底し、平和国家の建設を目途とし、知徳の一般水準を高めて世界の進運に貢献する……」ことにあり、「8月17日より第二学期を開始したが、戦局終結の大変、何か上司指示あるまで臨時休業とした。……ようやく9月1日二学期始業式。翌日以後、部隊駐屯のため五教室が使用できないので、午前8時より12時30分まで初五以上、午後1時より3時30分まで初四以下の二部教授プランを行った」と終戦直後の義務教育現場の混乱が続いたことを記し、ようやく「10月に入って3日に銃剣道・教練の禁止、5日戦時教育令の廃止、10日に学徒勤労令廃止、11月6日に武道禁止など、……戦時教育体制が一掃された」⁽⁵¹⁾。そして当時の役所資料を使って、八尾・速星国民学校に共学して学んでいた朝鮮人児童について、朝鮮人連盟富山支部の要請を受け入れ、「朝鮮人児童学院ができるまで暫定的に、同校（速星小学校——引用者）の一年生の放課後に、その一教室で学習が行われ」、「八月、……学校を新築し、両地区の児童約二〇名に朝鮮人教師二名が来て開校した」と記述・記録している⁽⁵²⁾。

『富山県史 近代下』（以下、県史近代下と略記）には、大正末の労働運動のなかで1924年7月15日に相愛会富山支部が旧細入村（現富山市）蟹寺で結成され、創立大会に日本電力工事場の約800人が参加したこと。また、昭和2年に富山県白衣労働組合信友会が結成され金泰文を委員長に、支部長に金泰文、副支部長に宋武秀が就任したこと。さらに昭和初期の富山県の労働争議のなかでも最大であった富山市山室の第一ラミー紡績争議において、9名の組合役員が解雇されたが、そのうちの3人が朝鮮人労働者であったこと。この争議で賃上げ、解雇反対で先頭に立ってたたかった朝鮮人労働者などを記述・記録している⁽⁵³⁾。

県史近代下の2年後に刊行された『滑川市史 通史編』は、一般に富山県の第1回メーデーが1931（昭和6）年とされているが、前年の1930年に滑川市で開催されていた事実を述べ、そこに富山県の朝鮮労働総同盟からの参加があったと記している⁽⁵⁴⁾。また『富山市史 通史 下巻』は、県史近代下の記録と叙述を引き継いで、第一ラミー紡績争議の影響を書き⁽⁵⁵⁾、「また、この争議には、労働者のなかでも最も底辺にあった女工と朝鮮人労働者が数多く参加していた。第一ラミーの労働者の賃金は、先述のように賃金格差構造の最底辺に位置していたが、ここには多くの朝鮮人労働者（約50名）が雇用されていた。彼らは、……ラミー分会の中心的な指導者としてこの争議を

(50) 『婦中町史』婦中町、1967年、1207頁

(51) 『婦中町史 通史編』婦中町、1996年、1053頁

(52) 前掲『婦中町史 通史編』1057頁

(53) 前掲『富山県史 近代下』944頁

(54) 前掲『滑川市史 通史編』528頁

(55) 『富山市史 通史 下巻』富山市、1987年、633頁

担つたのである」⁽⁵⁶⁾と明記するとともに、9名の指名解雇者のうち3名が朝鮮人労働者であったことに言及し、最後に次のように結論づけている。「争議は、労働者内部の差別と分断を乗り越え労働者として一致して闘う意味を教えたのである」。ここには戦前のメーデーで、朝鮮人労働者との連帯を掲げた精神が息づいている。15年戦争という昭和の侵略戦争下を『入善町史 通史編』は、第四章近代第五節六戦への歩み＜中国侵略と帰らぬ人々＞の冒頭で、「軍部や右翼勢力は国民の不満を侵略戦争に利用し、改革の気運をそらそうとした。それが満州事変に始まり太平洋戦争の敗北に終わるいわゆる15年戦争の始まりである」⁽⁵⁷⁾として、この戦時下の住民の生活を次の＜銃後のくらし＞の項で、国家総動員法と国民徵用令が出て、「すべての人と物を生活から切り離し、戦争配置に並べ変えていくものだった」に続けて、「けれども、多数の強制連行された朝鮮民衆や中国人捕虜はずっと悲惨で、耐えかねて反抗し、脱走して殺された者も多い」⁽⁵⁸⁾と植民地にされた朝鮮と侵略された中国のそれぞれの民衆のことを記しているのは、極めて稀な例といえる。

電源開発工事ではないが、山間地下の掘削工事に従事した朝鮮人労働者を記述したのが『庄川町史 続巻』である。『庄川町史 下巻』(1975年)は、「庄川水系の電源開発」の項を起こし、先述したように、明治後期、大正、昭和の時代までの各発電所を解説したが、現場の労働者に関する記述は極めて少ない上、朝鮮人労働者に全くふれない。ところが『庄川町史 続巻』(2002年)は、戦中の空白歴史明らかに、の項を起こし、「雄神に地下トンネル工場跡」の見出しをつけその冒頭、「『庄川町史（上・下巻）』の編さん際、近現代史で、戦時中や終戦直後の郷土史料は皆無の状態であった。これは終戦直後、国・県などの指令で資史料を大量に焼却したことが要因といわれている」⁽⁵⁹⁾と記し、その後、『米国戦略爆撃機調査団報告書』で新事実が明らかになったとして、「庄川町の山間地に航空機生産用の地下工場が建設されていた」が、そこには、「日本人技術者などの作業員約200人のほか、朝鮮人労働者約700人が作業に従事させられ、各民家には、最低5、6人ずつ分泊していた」、「作業はスコップやトロッコを使って、東西に15本の坑が20メートル間隔で掘られた。長いものは200メートルもあり、南北に3本の連絡坑もあったという。……坑がほぼ貫通し、棚を作り工作機械を運ぶばかりとなったときに敗戦になった」、「このような事実が戦後半世紀にならんとしているときに判明し、新聞などで報道されて、関係団体などに波紋をよんだ」⁽⁶⁰⁾とし、「続巻」編集執筆時に地元紙などで大きく報道されたことが影響したことをうかがうことができる。

おわりに

特に第5節でみたように、富山県でこれまで発刊された自治体刊・郷土史本には、朝鮮人労働者とその生活に関連した具体的な記述・記録はきわめて少ないことがわかった。記述されている場合も、電源開発の労働現場に関する記述・記録はほとんどなく、現場での労働争議の激化から当時の

(56) 前掲『富山市史 通史 下巻』633頁

(57) 『入善町史通史編』入善町、1990年、489頁

(58) 前掲『入善町史 通史編』491頁

(59) 『庄川町史 続巻』庄川町、2002年、743頁

(60) 前掲『庄川町史 続巻』745頁

苛酷な就労実態をかろうじてうかがうことができる程度である。これは富山県に限った事態なのか否かは不明である。たとえば隣県である新潟県の『佐渡相川の歴史』（相川町史編纂委員会、1971年）は、佐渡の金山の採掘に従事した朝鮮人労働者の現場と犠牲についても記していることが知られている。一方、兵庫県丹波篠山市に今日もその跡が残っている硅石鉱山の採掘に携わった朝鮮人労働者について『篠山町百年史』（篠山町、1983年）は、一言も言及していない。黒部市旧宇奈月町と類似した事例といえる。

ところで、自治体刊・郷土史本が近代日本の対外認識のなかで植民地朝鮮をどのように叙述すべきかは議論のあるところであろう。しかし、今回、自治体刊・郷土史本を調査してみて言えることは、明治時代の日清戦争の開戦に至る原因とその過程について、多くが“旧態依然”的な叙述の状態であることと底流では結びついていると思われた。詳しくは別に論じたいが、“旧態依然”とは、「1894年春に東学党の乱が起き、清国軍が朝鮮に出兵したので、それに日本が対抗し出兵して戦争になった云々」といった具合である。1894年7月に朝鮮の王宮を武力で占領し朝鮮政府を転覆した上、日本軍に清国軍討伐命令を出させた日本側が仕組んだ事件が、「7月23日戦争」とされる。「7月23日戦争」に象徴される日清戦争は、日本の侵略戦争であったことが明らかになって久しい。戦後の近代史研究を振り返ってみても日清戦争を中心に朝鮮半島を研究した中塚明氏の書籍は1970年代から多数、出版されている。また岩波新書では、藤村道生『日清戦争』が1973年に刊行されているほか、最近では、原田敬一『日清・日露戦争』（岩波新書、2007年）も入手できる。明治時代の本格的な対外戦争である日清戦争を手始めに近代日本を叙述する際、自治体郷土史担当者は、従来の記述・記録を再検討すべきであろう。富山県内における現状は、そうした知見が余りにも乏しいといわざるを得ないからである。

(むらかみ・くにお 一般社団法人黒部川扇状地研究所)

【資料2】

- ① 柳河原発電工事の完成が近づいた昭和2年1月29日の午前5時30分ころ、……通称大谷と呼ばれる狭い山あいの工事場に突然旋風がまき起こり、……石川飯場四むね、西田飯場一むねが倒壊し、多数の人夫が生理めとなつた。……急報に接した三日市署では、人夫百名をくり出して救援につとめた。しかし被害は意外に大きく、死者33名・重傷者22名に達し、死者の内訳は日本人28名（男12・女7・男児6・女児3）、朝鮮人5名（男1・女3・男児1）で、就寝していた家族の被害が目だち、その惨状は目をおおわせるものがあった。（816-817頁）
- ② 高熱隧道を掘りすすんだのはすべて朝鮮人労働者であった。最高160度の……しかし熱気と湯気のため10分くらいで交代しなければならず、労働時間は一応8時間、……実働時間は3時間台であった。この朝鮮人労働者達ははずり出しで日給15円、切端では20円～25円という当時では破格の賃金を得ていたという。
- ③ 「富山県・内鮮労働親愛会のグループ（1936-1937）（二）金泰植ら檢挙起訴され、親愛会は破壊されたが、金泰植が教えた人民戦線的政策は残存した鄭岩面、李順竜によって翌1937年9月、社会大衆党富山支部黒部班結成となって具体化する。「特高月報」昭和12年9月分はつきのように報じている」（498頁）として、「社会大衆党富山支部長矢後嘉蔵……は李順竜の稼働地たる黒部川筋工事地帯を視察し、一般鮮人の闘争心の熾烈なるを看取し、これが加盟を承認せり。本月（9月）16日下新川郡宇奈月において……鮮人李順竜外21名によりて社会大衆党富山支部黒部班結成大会を開催し、李順竜（班長）、郭小岩（庶務会計）、崔雲海（書記）の3名を役員に選任し、次記の宣言決議文を可決せり」（499頁）と労働親愛会が社会大衆党の黒部班に“昇華”した過程を辿り、宣言では「吾々は朝鮮人のみの労働組合を組織することを為さず社会大衆党入党したる所以は、日本臣民として、下からの内鮮融和のためにつくさんとする意図からである」と政府推進の内鮮融和政策を承認した。また決

議文三項目の3番に、「職場よりの出征兵士にたいする歓送を盛大にし餞別金をおくる」(500頁)と明記し、大陸侵略を本格化させた日中戦争への協力も謳った。

(4) 農労党富山県連合会は、朝鮮の労働者の組合活動に積極的に援助を行った。県内には大正15年ころに約2,000名近い朝鮮の労働者が働いていたが、……全国的な朝鮮の労働者の労働団体である相愛会の富山県支部が、婦負郡細入村蟹寺で創立された。この創立大会には、日本電力工事場の朝鮮の労働者約800人が参加し、……」⁽¹⁾ (944頁)。「(昭和10年——引用者)7月には、全協土建中部地方執行委員朴学守がやってきて、……同年11月2日は朝鮮新聞富山支局を設け、この組織は、同時に、黒部川県営水力発電工事に際し、朝鮮の労働者の傷害扶助料を佐藤組に要求したり……」(948頁)

(5) 大正の中頃迄桃原台(宇奈月温泉街)は二軒の作小屋丈で定住する者は一人もない荒蕪地でありました。この台地の下を流れる雪解けの豊富な水量と急流に、最初に着目した高峰譲吉博士に依る東洋アルミナム(株)の電源開発、これを継承した日本電力(株)関西電力(株)の黒部川開発史がそのまま宇奈月温泉開発史なのであります。この開発の途上で亡くなった多くの人達の中、遺骨の引取手なく無縁の仏となつた人も少なくなかったのです。

大正末期柳河原工事の「出し平」雪崩で35人⁽²⁾、昭和13年12月27日志合谷雪崩で84人、昭和15年1月9日阿曾原雪崩で26人、亦昭和11年から15年迄の高熱隧道工事では朝鮮労働者を含む数多くの犠牲者が出ていました。

「アイゴー、アイゴー」と泣き叫ぶ白衣の異国風葬列は今も瞼の底に残っています。この人達はもとより無縁の仏となりました。又、旅館では、昭和初期の世界的不況から多くの出稼の労働者として、女中さん、番頭さん、芸者さんがいて、この中に無縁の仏となつた方々がたくさんおられました。戒名とて無く、春秋の彼岸には諂ひ寄りもなく、ひっそりと眠って居たのでありました。

川沿いの火葬場建物の周囲にこの仏様は永く埋葬されて居たのですが、昭和62年7月火葬場廃止に伴って改葬の為発掘した折、多くの遺骨は土に帰ったものの尚新しい骨壺に入れて41基の御仏を此の度薬師寺靈園の新墓地に納骨する事になったのであります。

新墓地建立に際して御喜捨賜りました宇奈月町、関西電力(株)、自治振興会の皆様に厚く御礼申し上げます。現在の隆々と栄える宇奈月温泉の淵源として人柱に立った御仏様をこれから毎年8月7日のお盆の入りに読経を務めてまいりますが、地域の皆様の変わぬ御供養を御願い申し上げます。

昭和62年7月27日 桃原山薬師寺住職 舘 全鏡 奉賛会長 佐藤 喜一

(6) 『抗日朝鮮人の証言』を著した金泰輝の経歴を示しながら、彼が「1926年末より1930年まで富山県で活動していたという。……この本にたいする期待も大きかった。しかしこの期待は裏切られた。……(3) 1927年10月常願寺川水系の発電所工事場でおきた新庄警察署の拷問事件については、それが白衣労働信友会にかかる大闘争であったにもかかわらず一言もふれていない。そして一般にはあまり知られていない黒部発電所工事場問題(彼が個人プレーで解決した)をくわしく記している」(73頁)として、「彼の本は彼の個人プレーを中心としたもので「運動史」の資料としてはほとんど価値がない」(74頁)と断定している。

(7) 「黒部では虐待はなかった」という声をよく聞いた。本当かどうかということは別にして、その苛酷な労働を思えば、ある意味で彼らは虐待されていたと考えてよいのではないだろうか。豊坑の工事で即死した父親に取りすがって「アイゴー、アイゴー」と泣いていた家族の姿を忘れられないでいる人、隧道工事の犠牲になつた仲間の死を嘆く彼らの姿を覚えている人の話を聞いた時、間接的な虐待があったと感じた。(74頁)

(8) 632 富山日報(夕) 6.4 「愛本県電の土工百十二名が不穏 貸銀問題で飯場側と衝突し昨夕からストライキ」内地人土工41人 朝鮮人71人 (63頁)

646 富山日報(夕) 7.23 「架線から墜落し土工2名即死す 1名は治療2ヶ月を要する重傷 朝鮮土工二百余名騒ぐ」日電発電所工事場(黒部奥山)

(9) (追記) ……富山地方鉄道内山駅の近くに「呂野用墓」と読みとれる墓があり、側面には「1939(ママ)年10月9日死亡」と書かれている。……その後河内宇奈月町長や佐藤喜一氏らが中心となり薬師寺の墓地内に「萬靈の塔」が建立され、その靈が弔われている。(292頁)

(1) 今のところ、黒部川の電源開発現場からの朝鮮人労働者とは断定できない。

(2) 大正末期は作者の思い違いで、1927(昭和2)年の雪崩事故である。